

【研究題目】

中世やまと絵屏風の光輝表現技法研究

—旧里見家本「浜松図屏風」の想定復元を中心に—

【研究作品】

旧里見家本「浜松図屏風」の想定復元模写

文化財保存学専攻保存修復研究領域（日本画）

1323935 阪野智啓

■研究目的

旧里見家本「浜松図屏風」（東京国立博物館蔵、15世紀、以下旧里見家本）は、現存する最古の浜松図と考えられ、雲母地に金銀箔を多用したみがきつけの技法や輝く青色表現など、15世紀を中心とした中世やまと絵屏風の現存作例の中でも際立った技法的特色をもつ。しかし金銀の微塵箔を用いたみがきつけの雲霞や雲母地を基本とした彩色技法について、近世以降ほとんど継承されておらず、どのような技法や手順で描かれているのか詳らかではない。

本研究は旧里見家本の復元を軸として、中世やまと絵屏風の光輝表現技法の解明を目指すものである。旧里見家本は現存するやまと絵屏風の中でも古風な描写を備え、金、銀、雲母の光輝表現を併せ持つため、技法史を見据える上では恰好の存在といえる。本研究による技法史の解明と光輝性の再現は、近世初期にほぼ金箔一辺倒になる光輝表現の技法的変遷と断絶、あるいは作例がほとんどない14世紀のやまと絵技法を考える上でも意義があるものと考えられる。

■研究概要

本研究は旧里見家本の復元を通して、以下の4つの課題に着眼している。

①中世の孤立的技法「みがきつけ」と「雲母地」

15世紀から16世紀前半の作例調査により、中世の文献で「みがきつけ」と呼ばれた技法について、従来から指摘される金銀の微塵箔を撒きつぶす「微塵箔みがきつけ」に加えて、無造作な箔片を用いた「裂箔貼り潰し」もそれにあたる可能性があることを、扇絵の調査や旧里見家本復元による実技検証により見出した。また「雲母地」では、扇絵技法からの援用として正麩糊を用いた「糊地」の更なる技法開発を旧里見家本復元の中で進めている。

②15世紀の「みがきつけ」から16世紀の「金碧画」へ

15世紀のみがきつけ技法から16世紀に金箔平押しが主流となる技法的な遷移について、現存作例の傾向と併せて検討すると、15世紀の微塵箔みがきつけから、16世紀前半に切抜箔、そして16世紀後半に建箔の平押しが主流になったことが考えられる。また下地も16世紀前半では金箔平押しでもなお雲母地が主流であったものが、16世紀後半から紙地になっていることも明らかとなった。しかし雲母地の総金地屏風は、後世主流となる建箔の平押しとの技法および材料の差異が明らかであるため、連続性があるものとは考えづらい。

③15 世紀の「雲母地」から 14 世紀以前の「唐紙」へ

画中画や料紙の精査から読み解ける障屏画の下地技法の推移は、まず絹本綾地の絵画があり、それが唐紙に互換され、さらに雲母地に至るものだろう。このうち 12～14 世紀に海賦文を描いた唐紙屏風や障子絵が頻出し、同じ場面において海賦文の唐紙を使いまわしているような「絵画」も存在することが注目される。このことは、鎌倉時代には唐紙を下地としてやまと絵障屏画を描いていた可能性を感じさせ、室町時代の旧里見家本の海が雲母地に網代目の海賦文であることは、技法史変遷を考える上では極めて示唆的なものとなる。また画中画にある唐紙屏風は町物として流通した屏風でもあるため、宝物・上品の屏風とは技法の違いがあったことも同時に考えられる。

④浜松図の技法史的位置

古代の海図や画中画に見る浜松図に係る画像を通して系譜を整理すると、画中画浜松図の典型は、14 世紀では「遠視的な地景表現」と「唐紙下地」が散見されるのに対し、15 世紀前半から「近景がある地景表現」に替わり、金銀の雲霞と「雲母地」が現れる。また海図や州浜図では「海賦文」のような波濤表現の伝統も見て取れる。構図法は 15 世紀に近景形へ、そして二扇縁取りから六扇一括の一双屏風への変化があるが、それでも「一双三場面」が看取できる古代的構成を保持する現存屏風がある。旧里見家本では左右隻の区別があまりなく、14 世紀以前の一隻単位で屏風を用いた構図法の名残りも感じさせる。海賦文の海と厚い雲母地、金銀のみがきつけの雲霞を併せ持つ旧里見家本は、技法、表現双方から 14 世紀以前の記憶を呼び起こす要素を潜在的に持ち合わせている。

以上に加えて唐紙技法の系譜を鑑みたとき、現時点での結論は以下ようになる。絹本や絹本綾地を模したと思われる唐紙や雲母地の障屏画下地技法の系譜が中世にまずあり、十五世紀に現存する旧里見家本のような金銀みがきつけを伴う雲母地屏風とは、十四世紀までの画中画に頻出する町物の唐紙屏風の最終期のものであったと考えられる。同時に絹本をそのまま維持する宝物・上品の屏風や具引きの屏風も存在するため、唐紙屏風や雲母地の系譜はあくまでも汎用的な技法として捉えるべきものである。雲母地金箔押しの屏風も同様の立場にあり、ドーサ引きの素地に金箔を押す近世の技法とは一線を画す。雲母地とは、淡く輝きしかもにじみ止めも兼ねた下地が大量生産でき、更には画面全体を雲母でコーティングすることで素地の強度を保つことのできる、大画面（消耗品）の需要に応えた技法であったと言えるだろう。

(2000 字)